

特260
709

6
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

始



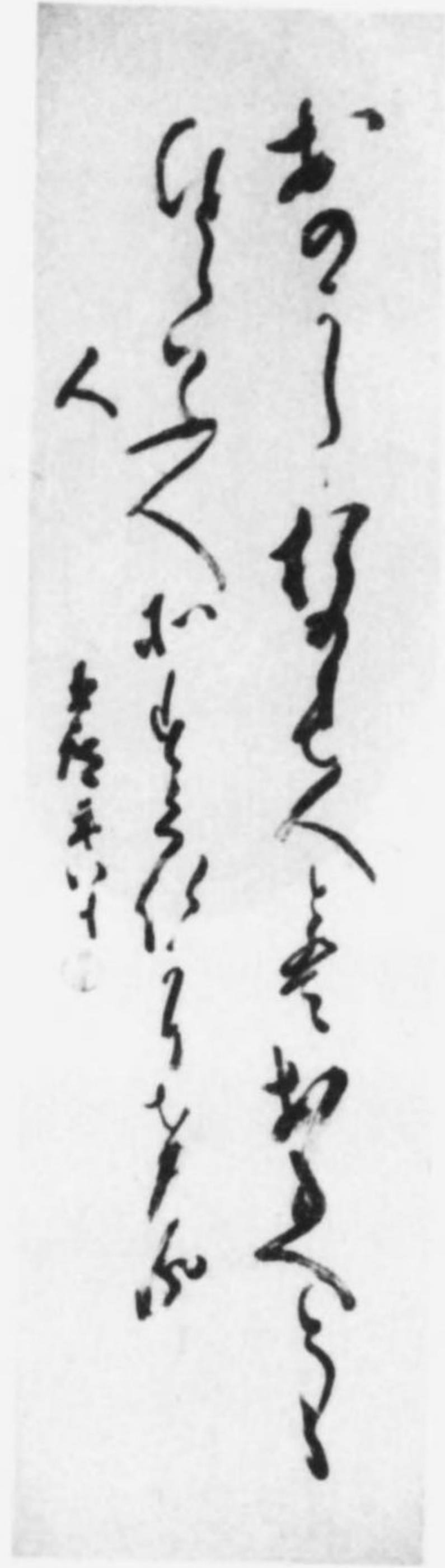
特260
1709

特260
1709



海老井乃清





先師齊垣内翁墨蹟



福永心福



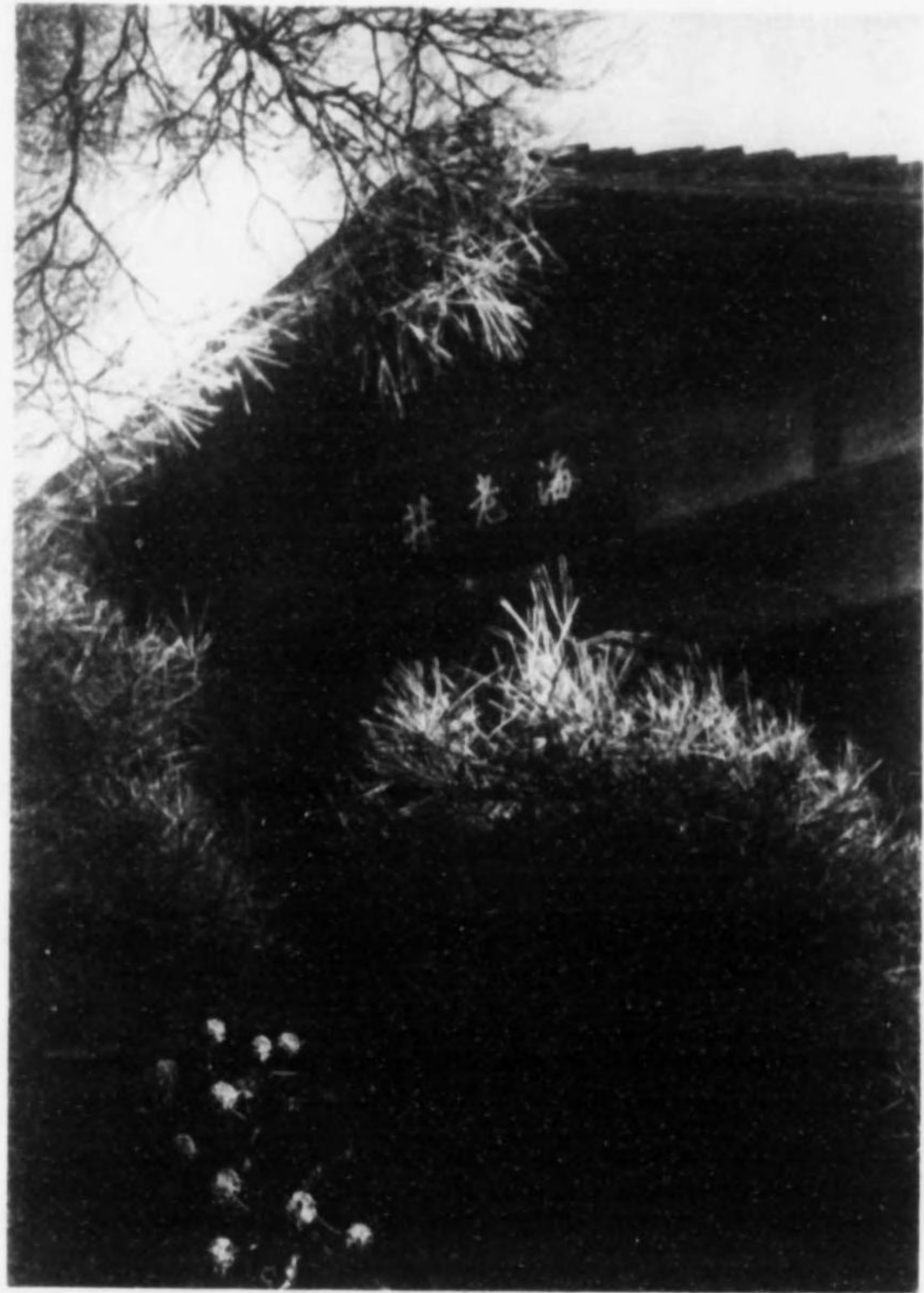
Handwritten musical notation on a staff, including a treble clef and several notes.



一人
 國
 鐵
 代
 心

湖
 けりてふれむらり
 りんたふふし
 志
 大

鐵
 心
 代
 國



古より稀なりといふ齡を迎へて、ながき夜の夢にも似たる過ぎにし生涯を願れば、恰も踏み越え來りし幾山河の遠くかすめるを、旅路の坂に見かへるが如き心地せらる。己れ年なほ若かりし頃、齋垣内の翁岡直廬大人に就きて教を受けしが、歌の林に分け入る初めなりき。其の後くさぐさの務にかゝづらひ、事に觸れ物にあひてはおもひをのべ、人を思ひ己れを省み、御代を壽ぎ世のさがを慨きて、折折に詠み出でつる歌屑、いつしか積り／＼て幾千百の多きにのほりぬ。もとよりおのが心やりに詠みすてし拙きすさびなれば、世の物笑ひとならむもうら恥かしけれど、さりとして又自らにはいづれもなつかしき思出艸の露なれば、消えゆくままにうち捨てんもあたらしくて、彼此かき集め、同じ道の友なる藤原鐵彦、中塚正齊、藤田安

良の君達の助をかりて、一節にてもいひかなへたりとおほしき歌六百餘首を選び出て、一卷となし、己が家の古きゆかりある井の名に因みて海老井の滴と名づけ、自壽の記念として梓に上せ、睦ましきかぎりの人々に頒つこととはなしつ。清き山の井ならぬ市中の古井ながら、底の心は汲む人こそと思ふも烏澁がましくや。終りに此集を世に出すにつきては、前に掲げし三人のほか、永き交りある木畑竹三郎、藏知矩、松浦直樹の君達の深き心を添へ給ひつる厚きよしみを悦びて感謝のまこゝろを表はすになむ。

昭和十四年十二月

國 富 直 香
しるす

親友國富友次郎君が古稀自壽の意を表する爲、歌集海老井の滴を上梓し知人に頒たれるとて、私共に一言を徵せられた。惟ふに、私共は君と庚を同じくし、青年の頃學窓を共にし、尋いて同じく教育の事に従ひ、爾來歴來つた道程は各違つて居ても、交情の親しさは少しも渝ることなく、相俱に古稀の齡を迎へるに至つたのも實に浅からぬ因縁であつて、私共が不敏を省みず喜んで君の需めに應じた所以である。但君の作品について語るは他に然るべき人があると信ずる。私共は君と相識ることが久しく且深いので、茲に君の經歷の概要をしるして、此書を読む人の參考に資したいと思ふ。

君は備中鴨方の名門高戸敬三翁の四男で、弱冠の頃當市紙屋町の國富大三郎翁の養嗣子として入家せられた。國富家は由緒ある舊

家で、藩制時代には町年寄を勤め、苗字帯刀を許され、歴代の主人は徳望高く豊かなる教養と趣味とを具へ、市の長老として推重せられて居た。君は明治二十三年岡山縣師範學校卒業の後、初等教育に従事せらるゝこと十餘年、故あつて一旦引退せられたが、同三十七年再び起つて岡山實科女學校長となり、後就實高等女學校の併置と共に其校長に推され、爾來専ら女子教育に盡瘁せられ今日に至つて居る。其間縣會議員に一回、市會議員に三回當選せられ市會議長に推さるゝこと前後二回に及び、帝國教育會評議員岡山縣及岡山市教育會長、備作惠濟會長、吉備保育會長等の要職を帯び、大正十年には官命を奉じて外遊し、半歳に亘つて歐米の教育を視察せられた。其他君の關與せられて居る公私の教育及社會事業を枚擧することは姑く措き、茲に特筆すべきは大正十年

今上陛下の東宮に在らせられ、本縣に行啓の砌、教育功勞者として特に拜謁竝に御陪食仰付けられた事と、昭和三年に藍綬褒章を拜受せられた事とである。是れ偏に君が教育を以て自己の天職となし、名利を趁はず權勢に媚びず、専ら教育の振興と社會の福祉との爲めに盡された努力の報いられたものであつて、無上の榮譽たるはいふまでもなく、家門の光輝を發揚せられたことも亦大なりと謂ふべきである。君は青年の頃より岡直廬翁に就て和歌を學び、日常繁劇寧處に遑なきも吟詠を廢せず。しかも君の歌は高雅の調べの中に忠愛の誠と彝倫の訓へとを寓し、世の常と大に趣を異にせるは、私共の言を俟たぬこと、思ふ。君は又父祖の遺風を繼いで夙に茶道を修め、爐煙茗香の裡に清寂の三昧境に味到し、その養ひ得たる氣品は自から行履の間に現はれて居る、君は家庭

に於ても頗る多幸にして、令室精美子刀自は婦道の譽れ高く、明年を以て金婚の慶を迎へらるべく、又振々たる兒孫皆恙なく榮えて、福祿壽の三つを併せ享けらるゝは全く積善の餘慶である。めでたき縁ある海老の井の水は混々として竭きず、餘澤永く家門を潤し、その滴りの凝つて珠玉の篇となれるは、世に稀なる例しといふべく、君がよく南山の壽を保ちて、尙次々に新しき集の世に出されんことを切望する。

昭和十四年十二月

藏 知 矩
木 畑 竹 三 郎

海老井の滴

國 富 直 香

春

立 春

あつさ弓春としいへは何となく

かすまぬそらものとけかりけり

浦 立 春

もしほやく煙の末もかすみつゝ

うらのとかにもはるは來にけり

春たちてほとなく雪ふりければ

立ちそめし春の日数は浅けれど
つもれる雪のふかくもあるかな

新年

新玉の年のはしめにとくおきて
をはりなき代をまついはふかな

新年

曇りなき御代の光のまつ見えて
さやかにあくるとしのはつそら

新年

東のそらをあふきてはつ日かけ
をろかみ居れば田鶴なきわたる

新年

少しくは顔赤らめてゆくもよし
としのほきさけいまひとつめせ

新年

あらたまの年たちそめし朝には
まつさへえたをならさゝりけり

新年

さらぬたに心うれしきあら玉の
としのはしめにうくひすのなく

新年

雪ふりて足駄あやふしとその酒
ほとくにしてはやくゆかなむ

若水

くみそむるその若水に老の身の
よるとしなみのうつらすもかな

春水

鳶のまふ空は長閑にかすめるを

ふちのこほりはとけんともせず

雪中子日

豊年のしるしときけは雪なから

子の日の小まつひきはやさまし

若菜

うらくと霞たつ野の朝ほらけ

わか菜つむ子のこゑきこゆなり

同

あし鶴の聲の霞めるのへにこそ

千代のわか菜はつむへかりけり

野若菜

いさつみて友に分たん野に出し

しるしはかりのわか菜なれとも

同

思ふとち若菜つみつゝ思はすも

野すゑはるかにたつねきにけり

野霞

若駒のこゑのみ遠くきこえつゝ

のとかにかすむはるの野邊かな

同

若なつむ子らは歸りて靜かにも
かすみにくるゝはるの野邊かな

同

富士の嶺も秩父の峯も消えはてゝ
かすみたなひく武さし野のはら

海上霞

いそ山の松ふく風もなみの音も
しつまりはてゝかすむはるかな

遠山霞

瀬戸の海や鯛つる船のほの見えて
かすみににほふ伊豫のとほやま

海邊霞

打わたす槌の戸かけてさくら鯛
ひきあみの濱にかすみたなひく

籠鶯

このうちに庭の梅か香通ひけむ
よろこはしけにうくひすのなく

霞中鶯

梅かをる山のした道あさゆけは
かすみのなかにうくひすのなく

野亭鶯

梅さける野守か庵をおとなへは
こたへかほにもうくひすのなく

同

梅の花さける野守かいほに來て
おもひもかけすうくひすをきく

松

鶯

さく梅は花見る人にまかせ置て
小まつかはらにうくひすのなく

都

鶯

今日は飛鳥あすは上野と次々に
はなをわたりてうくひすのなく

同

東山やまのくろたにしゝかたに
たにわたりしてうくひすのなく

餘寒風

梅の花さき後れたりいつよりも
今としははるのかせさむくして

雪中梅

鶯のきなくを見れはうめか香は
つもるゆきにもうもれさるらむ

梅初開

次々にさく枝もありまつをりて
ともにおくらむうめのはつはな

同

一枝は友におくりてひとえたは
かめにやさゝむうめのはつはな

隣 梅

中かきの隔てはあれと隔てなく
となりのうめの香そかよひ來る

同

鶯の音をなつかしみうかゝへは
となりのにはのうめはさきたり

田 家 梅

をれなから花さきにけり稻束を
かけてほしけむ野へのうめか枝

野 梅

わら大根えたに梢にかけられて
わつかにさける野へのうめかな

梅 薫 風

玉たれのをすのひまもる春風も
かをるはかりにうめさかりなり

野 徑 梅

下枝は若なつむ子に手折られて
まはらにさける野路のうめかな

田 家 梅

わら火たく烟のすゑにほの白く
見ゆるやうめのはやしなるらむ

同

大根ほすはしらとなりて畦道に
さけるもあはれうめのはつはな

庭梅

たきもの、薫ましりて常ならぬ
うめか香すなりまとのうち外に

早春柳

野やきせし里川つゝみ春たちて
けふりそめたるあをやきのいと

路柳

手遊ひに結はまほしく思ふかな
ゆきゝのみちのあをやきのいと

田家柳

あくた火の烟の末にかすむなり
たふせのいほのあをやきのいと

蕨

花を見てかへさの道の手遊ひに
手折るもうれしをかのさわらひ

初春月

白雪のまた消えのこる山のはに
かすみそめたるはるの夜のつき

春月

桃さくら花の匂ひのけしめなく
おほろにかすむはるの夜のつき

都春月

うちわたすかすみか關も櫻田も
はなくもりせりおほろつき夜に

春雨

小夜中にね覺てきけは静かなる
はるのあめにもおとはありけり

同

をりくにはなの雫の音のして

はるさめけふる夜半のしつけさ

夕春雨

夕つきのかけもかすみて蛙なく

かきつの小田にはるさめそふる

春夜雨静

月かけも蛙のこゑもくもりつゝ

ふるはるさめのをとしつかかなり

社頭春風

はふりこか朝きよめせし廣前に

はなをちらしてはるかせそふく

雉子

雨はれて朝日かけさすかた岡の

小まつかはらにきゝすなくなり

雲雀

そら高くのほる雲雀も雛のゐる

むき生のうへははなれさりけり

待花

うくひすの初音をきゝし朝より

そゝろにはなのまたれぬるかな

初花

知らぬまにさきたる庭の初花は
まちて見るよりうれしかりけり

園花

庭の面のはなに終日あくかれて
よそこにこゝろのちるひまもなし

閑居花

まれになく鶯をのみともとして
ひとりはな見るやまかけのいほ

海邊花

盛りをは待たてちるらん荒波の
よするいそへのやまさくらはな

月前花

あかさらはあくまで見よと終夜
さくらのはなにつきやてるらん

霞中花

紅のいろをわつかにほはせて
かすむあたりやさくらなるらん

外國花

天地の匂ひなるらむとつくにの
はてまでさけるやまとさくらは

花未飽

なれぬれはあくてふ事は大方の
はな見ぬひとのこゝろなるらむ

花満山

吉野山おくの千本は知らねとも

ふもとにはなへてさくらなりけり

花の頃何時も事繁くして花見する暇なければ

此春も知らて過しぬいつさきて

何時ちりにけむやまさくらはな

深夜蛙を聞きて

さよふけてきけは蛙の聲すなり

いへはちまたの真なかなれとも

校庭燕

をしへ子か學ひの庭にうつ毬の

したをくゝりてとふつはめかな

春野蝶

なたねさく野への畦道朝ゆけは

みきにひたりに胡てふとふなり

春旅

櫻さく木蔭に今日もくらしけり

はな見んとてのたひならなくに

春車

霜はしらはる日にとけて小車の

いゆきわつらふやまのしたみち

暮春

花を待ちはなを惜みて菅の根の

なかきはる日にくらしつるかな

夏

首 夏 庭

絶えまなく古葉零れて若葉さす

にはのきよめのいそかしきかな

餘 花

人心なへてあを葉にうつれるを

うつるいろなきおそさくらはな

残 花

時鳥なく音をまつの木かくれに

なほさきのこるやまさくらはな

雨後首夏の花

雨に濡し庭のくちなしねむの花
見ゆるもゆかしあを葉かくれに

残鶯

柴くりの花もこほれて小雨ふる
かたやまはやしうくひすのなく

新樹

てり渡る月の影さへもらぬまで
にはのこすゑにわか葉さしたり

水邊新樹

大水にくつれしきの川やなき
たふれなからにわか葉さしたり

行路新樹

若葉さす並木つたひに歩まゝし
ひたりゆけとのおきてなれとも

新樹露

風わたる若葉のかけに立よれば
つゆもこほれてすゝしかりけり

新竹

す直にも生ひたちけり雨風の
またうきふしを知らぬわかたけ

園新竹

素直なる心を友とらつしうゑし
そのゝわかたけかすそひにけり

窓外竹

すむ人の心のまゝに茂りあひて
うき世へたつるまとのくれたけ

待郭公

時鳥まちつゝ居ればあけやすき
なつの一夜もなかくそありける

郭公一聲

田植めの菅の小笠のすけなくも
たゝひとこゑをなくほとゝきす

子規頻

時鳥きかぬ夜まれになりけり
まちてねむらぬこともありしか

夕早苗

夕月のかけをふみつゝ賤のめは
かと田の早なへとりいそくなり

五月雨晴

なる神の音をかきりに五月雨の
くももこゝろも晴れそめにけり

水邊水鶏

まこもくさしける野澤に夕月の
かけもにほひてくひななくなり

水邊螢

渡し船つなきすてたる川の邊の
やなきのかけにほたるとふなり

江 螢

夕月の入江のあしの葉かけより
ひかりを見せてとふほたるかな

簾 内 螢

夕まくれふく川風にさそはれて
をすのうちにもほたる來にけり

松 下 螢

夕風を松の木かけに立ちよれば
しみつなかれてほたるとふなり

海上 夏月

波の上に月のてる夜はふく風の
身におほえねとすゝしかりけり

閨 夏 月

ねやの内にさし入る月を若竹の
葉こしに見るもすゝしかりけり

海邊 夏月

汐あみてしはしいこひし松蔭に
よるはたいてゝつきを見るかな

夕 顔

庭はあれて月のみすめる柴垣に
ひとりにほへるゆふかほのはな

池 蓮

白妙のはちすの花をいけとのゝ
すこしに見るもすゝしかりけり

雨 後 蓮

夕立のなこりの露のちる見えて
ゆふかせすゝしいけのはちす葉

夏 水

進みゆく御代にうまれて氷柱の
なかにもさけるはなを見るかな

蟬

心地よく熟睡し居れは一しきり
まくら邊ちかくせみそなくなる

山 家 蟬

軒近く蟬のこゑのみきこえつゝ
くるひともなしやまかけのいほ

雨 後 蟬

白雨のすきて涼しきまつか枝に
こゑもしめりて日くらしのなく

漁村夕立

ひしき賣て家路に急く海士よりも
なほあしはやしゆふたちのくも

夏 朝

夏草の露ふみわけてあさまたき
そゝろあるきはすゝしかりけり

夏 雲

雨ふりて雲のうこかぬ夏の夜は
むしあつくしてねられさりけり

納涼

月のかけ波にくたけて川かせの
おともすゝしきなつの夜半かな

田家納涼

植わたす小田の早苗の生たちを
いさ見にゆかむすゝみかてらに

水邊納涼

うき草の露をはらひて池の面を
わたるゆふへのかせのすゝしさ

樹蔭涼

茂りあふならの木蔭はふく風を
身におほえねとすゝしかりけり

秋

雨中立秋

雨にぬれて桐のひと葉の力なく
落つるを見ればあき立つらしも

早涼到

くれ竹の葉末の露にすゝしさの
まつ見えそめてあきはきにけり

初秋朝

たちそめし秋のあしたは白露も
かせもさすかにすゝしかりけり

早秋

草むらにおく白露のたま／＼に見ゆるやあきのはしめなるらん

初秋風

昨日今日ほにいてそめし野司のをはなかうへにあきかせそふく

初秋雨

秋たては風のみならずふる雨のおともさすかにすゝしかりけり

初秋虫

なつ衣また更へなく立つ秋をなにゝ知りてかむしのなくらむ

初秋草花

三つ二つあきつとひかふ里川にほひそめたるへにたてのはな

残暑

夏といふ名のみ流れてみそき川しはしよとむはあつさなりけり

野外薄

しけりあふ野への小薄ゆく道をさまたけなからなにまねくらむ

虫聲非一

七草の花のほひのいろ／＼にあはれをつくるむしのこゑかな

秋 川

藻に潜む魚もさやかに見ゆるまで
すみこそわたれあきのかはみつ

秋 田

かゝしのみ立る門田の畦の上に
ゆふくれさむくからすなくなり

同

晩稻ほす門田の畦にかゝしのみ
立てるもさひしあきのゆふくれ

秋 夕 雨

もすのなく梢の紅葉かつちりて
ゆふへさひしくむらさめそふる

秋 雨

野分して破れし窓のはせを葉に
またおと立てゝむらさめのふる

社頭 秋 風

八束穂をそなへてまつる幣殿に
すゝの音立てゝあきかせそふく

秋 眺 望

秋霧のたえまゝに見ゆるかな
やまのもみちは野邊の小すゝき

月 前 虫

久方のそらゆく月のすめはすみ
くもれはくもるむしのかゑかな

月出雲

浮雲もこゝろもはれて高嶺より
さやかにいつるもちの夜のつき

初昇月

まちわひし人の心をうこかして
しつかにいつるあきの夜のつき

田家月

垣内田の芋の葉ことにおく露を
さやかに見せてすめるつきかな

月映水

てる月の影をくたきてたつ波の
きらめくかたやあさ瀬なるらん

水邊月

淵と瀬のけしめもさやに見ゆるかな
みたれみたれぬつきのひかりに

月出山

山のはに月は出にけり暫時くは
みねのまつはらはなれすもかな

古城残月

あれはてし大城の上に影ふけて
のこるもさひしゆみはりのつき

月前雁

窓あけて雁なく空をなかむれは
さやかにつきのてる夜なりけり

海邊月

涼しさをなみにたゝへて夕汐の
みつのはま邊にすめるつきかな

月前菊

おく露のひかりもそひて久方の
つきににほへるしらきくのはな

夕鹿

さらたに霧立こめて淋しきを
牡しかなくなりあきのゆふくれ

鹿聲幽

萩の葉のそよきのひまに心して
きけはきこゆるさをしかのこゑ

深夜擣衣

ふくる夜の物の哀をうちそへて
かすかにかよふつちのおとかな

山村霧深

朝な夕なもすの聲のみ聞えつゝ
あききりふかし小やま田のさと

山家霧

のき近き紅葉の色も見えぬまで
きりたちこむるやますみのいほ

故郷鶉

あれはてゝ月のみすめる古郷の
まかきのかけにうつらなくなり

菊

餘りにも人のたくみの技すきて
見るへききくのなき世なりけり

同

大君の大みしるしのきくのはな
けに日のもとのはなのおほきみ

同

庭にいてゝめてよ幼子十あまり
六ひらにさけるきくのさかりを

野

菊

糸すゝき招く野末に来て見れば
いまこそきくのさかりなりけれ

紅葉浅

梢のみ色つきそめてさかりまつ
ほとこそよけれ木々のもみちは

池邊紅葉

水浅き池のなきさに染めいてし
紅葉のいろのふかくもあるかな

山寺紅葉

山寺のいらかの上にきはみたる
いろの見ゆるや公孫樹なるらん

三石の山の紅葉を見て

白妙の雪にも似たるいはか根に
もゆるもみちのうつくしきかな

山 紅 葉

山松をところくに残しおきて

みねもふもともみちしにけり

後樂園紅葉

たつのせに紅葉かゝれり園守の

おひしはゝきやえたにふれけむ

雨中紅葉

紅葉をぬらすのみにて散さすは

いかにうれしきしくれならまし

残 紅 葉

ちり残るたゝ一ひらに眞盛りの

もみちのいろをしぬひてそ見る

校庭に紅葉を見て

ふる里に錦かさりてかへれとの

こゝろを見せてもゆるもみちか

鳥 紅 葉

あく迄も紅葉見しかないつく鳥

しまのなゝうらうらめくりして

山路紅葉

名も知らぬ木々の紅葉の色見えて

あかぬはあきのやま路なりけり

暮秋紅葉

二葉三葉梢にのこるもみち葉は

くれゆくあきのかたみなるらむ

田 鵲

おくてはむ雀の聲をうちけして
けたましくももすのなくなり

山 家 柿

赤玉のすたれにかへて柿のみを
のきにつるせりやまかけのいほ

礪 中 暮 秋

かきりなく心ほそきは雨ふりて
くれゆくあきのたひ路なりけり

暮 秋 鳥

啄木鳥のくち木をつゝく音のして
くれゆくあきのゆふへさひしも

冬

落 葉

をしまれて散りたる後も苔の上に
にしきをかさるにはのみちは

谷 落 葉

ふゆされは落葉つもりて谷川の
なかれもつひにかれはてにけり

落 葉 如 雨

ふる雨の音かとはかり絶まなく
もみち散るなりやまかけのいほ

山時雨

越えて來し嶺には虹の見えなから
むかひのやまにしくれふるなり

月前時雨

紅葉をしはしぬらして久かたの
つきにさはらぬむらしくれかな

残菊

紅葉ちり木實こほるゝ庭の面に
ひとりにほへるしらきくのはな

初霜

みその守菊にかさおけこの朝け
はつしもふれりふゆもまたきに

同

おく霜の早きを見ても思ふかな
こかひのくはにさはりなきやと

山家霜

山賤かかきあつめたる庭の面の
おち葉における今朝のはつしも

市路霜

いつのまにおき渡すらむあくるまで
ひとあとたえぬいちのあさしも

田上霜

風さゆる小田のかゝしの笠の上
まつこそ見ゆれ今朝のはつしも

落葉霜

はきよせし庭の落葉の上へのみ
今朝めつらしくしもを見るかな

野寒草

きつねなく枯野の千草霜さえて
ふく夜あらしのおとのさむけき

冬閑居

道もせに落葉つもりて今ははや
とふひともなしやまかけのいほ

寒月

きつねなく野路の篠原霜さえて
つきかけさむし夜やふけぬらむ

屋上霞

年をへてかたふく軒の板ひさし
くたくはかりにうつあられかな

夜霞

落葉ちる音にはなれてぬる夢を
やふるは夜半のあられなりけり

同

さらぬたにね覺勝なる老の身の
ゆめをくたきてあられうつなり

同

老の身の疎き耳にもきこゆなり
しつまりはてしよはのあられは

初雪

めつらしくはつ雪ふれり美作の
あかたさかひのたか嶺く

山雪

そま人の斧のひきも埋もれて
ふるゆきふかし木曾のおほやま

庭雪

常ならぬ窓のあかりと怪しみて
つまとあくれはゆきそふりたる

水邊雪

川岸の竹もたわみてふるゆきに
ふねのみちさへうつもれにけり

風前雪

北風のふきのまに誘はれて
かき根ふかくもつもるゆきかな

山家雪

柚人の斧のひきもうちたえて
しつるゆきのおとのさむけさ

夕雪

夕からすかれし梢にさわきつ
ゆきにくれゆくやまもとのさと

松上雪

風絶えぬ高ねの松の木すゑには
ゆきもふかくはつもらさりけり

雪中鳥

ふるゆきのしつる、音に驚きて
ねくらにさわくゆふからすかな

雪中竹

ふる雪にしはし委せて撓むこそ
やかてもたけのみさをなりけれ

雪のふる夜よめる

わか宿の軒端にたちてから笠の
ゆきうちはらふひとやたれなる

雪中寒樹

ふる雪に埋れはて、も松はまつ
たけはたけなるすかたなりけり

夜雪

梢よりなたる、音にゆめさめて
ねられさりけりゆきのふる夜は

雪中人來

とはる、は嬉しけれとも庭の雪を
ふまる、ことをしくもあるかな

雪中炭竈

櫻炭今日もやくらしふるゆきの
はなちるそらにけふりたつ見ゆ

埋火

のき近き梅のかれ枝をりそへて
のとかにかたるうつみ火のもと

庭 早 梅

難波津を手習ふやとの窓の外に
はるまぢかねてうめかをるなり

冬 南 天

ゆきとけて色はえにけり南天の
たまのまたまの丹たまあかたま

雜 之 一

山

あそ山かきり鳥山かしらぬ火の
うみをへたてゝ見ゆるたか嶺は

瀧

麓よりかへり見すれは山まつの
木のまにかゝるたきのしらいと

雨 後 山

しら雲のたえまゝに山まつの
こすゑも見えてあめはれにけり

泉聲幽

かすかなる清水の音を松かせの
たえまにきくもさひしかりけり

山中泉

なく鳥のこゑかすかなる谷底に
しみつなかるゝおとそきこゆる

水聲幽

山里の軒のまつかせしつまりて
かすかにひゝくたにかはのみつ

瀑布

おちたきち轟く水のおとも名も
たかくきこゆる那智のおほたき

河水澗

朝日川あら手のわたし水かれて
かちわたりするひともありけり

山色

新(御大典の年によゆる)

草木みな新よそひして初御代の
みゆきまつらし比叡のおほたけ

谷杉

ひるもなほなく梟のこゑすなり
たにははすきのしけりくゝて

同

大木曾のみ谷のおくの杉むらに
をのの音すなりみや木こるらし

岩上松

岩の上に根さし固めて榮えゆく
まつのみさをの高くもあるかな

同

こけむせるいはほの上の老松は
いく代むかしの根さしなるらむ

巖苔

神路山峯のいはほの苔のいろは
かみ代のまゝのみとりなるらむ

社頭松

あふき見る神の社の千木の上に
たかくそひえて立てるおいまつ

庭上苔

ふむ人の絶えてあらねは庭もせに
こけむしにけりやまかけのいほ

同

年をへし様には庭をよそへとも
ゆるさぬものは苔にそありける

同

人とはぬ庭の木かけの苔むしろ
とりよりほかにふむものそなき

城濠白蓮

ものゝふの清き心をほはせて
にこりに染まぬはなはちすかな

古松

しめはへて神のます木と仰くまで
まつはいたくもとしをへにけり

谷岩

さわかしき水の音すなり谷底に
なかれをいせくいはや立つらし

竹林

ゆけとくつゝく堤のたけ藪に
あきはてにけりよとのかはふね

巖

動きなき御代の例にひかれたる
いはこそさちのきはみなりけれ

雨

ふる程は心わひしきものなから
あめはくさ木のいのちなりけり

夕風

夕くれのかねの響のさひしさを
四方につたふるかせのおとかな

薄暮雲

あかつきに分れし雲も夕されは
おなしたか嶺にまたかへるらし

水

器にはしたかふ水もにこりゆく
世のなかれにはならはさらなん

雲

定めなきものとき、しを朝には
かならすかゝるみねのよこくも

山家夜雨

ふくろふの聲もしめりて山里の
小さめそほふる夜半のさひしさ

氷 囊

あたゝけき親の心のなさけにて
ひやすこほりにやまひとけたり

夕 鳥

さらぬたに淋しきものを山里の
くれゆくそらにからすなくなり

海邊眺望

磯山の松のむらたち見えそめて
なみのほのかに夜はあけんとす

晩 鴉

鐘の音も遠くきこえてくれ渡る
ゆふへさひしくからすなくなり

鳶

まふ鳶のつはさ斜にかたふきぬ
そらにはかせやつよくふくらし

夕陽映島

沖遠くとふやかもめの影見えて
はなれ小しまにゆふ日さすなり

海邊燈

うちよする波の音ふけて燈火の
かけかすかなりうみつらのさと

薄暮煙

夕からす歸りゆくへを眺むれは
とほやまさとにけふりたつなり

漁村晩景

漁する船はかへりてなみの音も
しつかにくるゝうみつらのさと

海邊煙

夕けふり浪の上遠くなひくなり
いそやまおろしいたくふくらし

鷺

沖つ洲は汐ひにけらしいそ山の
まつをはなれてしらすきのとふ

汐干

妻も子も汐干かりにとたち出て
海士かたまやはもるひともなし

鳥城朝陽(岡山七景の内)

しろの上に朝日さすなり搦手に
ゆみはりつきのかけをのこして

石山松籟(同上)

瀬の落つる音にたくひて石山の
まつのことすゑにあらしふくなり

公園鶴涙(同上)

思ふまゝに空とふ鳥をうらやみて
なくか御そのゝあしたつこのゑ

松上鶴

浪荒きなきさはなれて静かなる
まつにねむれる田鶴の長閑けさ

海路

はるくと遠き海路をこき行は
見なれぬしまもなつかしきかな

海上浪静

松にのみ風はのこりて浪の音は
しつかになりぬおほ和田のはら

白鷺立江

汐干なは渚のををとらんとて
いり江のあたりさきのたつらん

沖船

沖つ船ゆくとは更に見えなくに
しまのあなたにはやもかくれぬ

同

見るかうちに帆影遙になりけり
おひてのかせやいたくふくらし

嶺上雲深

越えて來し高根の松を仰き見れは
ふかくもくものかゝりけるかな

朝眺望

山の端の雲の一むらいろめきぬ
いまやあさ日のいてんとすらん

海邊巖

しまき吹沖つ荒浪とたゝかひて
いそふりもせぬ五百津いはむら

漁村曉

海士のほす軒端のあみに有明の
つきはかゝりてしらみそめたり

湖上眺望

ゆくふねを遙に見れば海の名の
にほのうかへるこゝちこそすれ

鶴立洲

沖つ洲によるや千年のとし波を
つはさにかけてたつそあそへる

社頭燈

神鳩のあさゑをあさる廣まへに
なほ夜をのこすみあかしのかけ

朝鴉

あさ戸出に鳥なくなりまかつ事
ありもやすらむこゝろしてゆけ

離島

はなれたる島のたよりも朝夕に
きけばきこゆるきみか御代かな

朝海

ゆたかにも朝潮みてり榮えゆく
くにのひかりをなみにたゝえて

家

海をうつめ山をひらきて年々に
いへのかすますきみか御代かな

水道

車井の音もきこえすなりにけり
くたゆくみつをひきそめしより

山村夕

鳥なく聲もねくらにしつまりて
ゆふへさひしきみやまへのさと

同

百鳥のこゑしつまりて夕されは
かけひのみつのおとのみそする

窓中残燈

窓の内に書よむ人のけはひして
さひしくのこるともし火のかけ

山家路

清水くむたゝ一筋のみちさへも
こけにうもるゝやますみのいほ

山家客來

とはるれは嬉しかりけり山里に
うき世をさけてすめる身なれと

翠松繞家

千年經し松をめぐらすわか庵は
よろつ代かけてさかえゆくらん

山家如春

松の雪しつれて落つる日當りに
こからなくなりやまかけのいほ

閑居

たま／＼に聞ゆる鳥の聲のみそ
わかかくれ家の友にそありける

山閑居

踏分てとひ來る人もなかりけり
あまりにやまのおくに住まへは

捕虜

仇なから哀なりけりとりこにも
くににつまあり子ありと思へは

棄兒

すてし親の心おもへは棄られて
泣ける子よりもあはれなりけり

遊女

さそはるゝ風のまに／＼心なく
なひくもあはれあをやきのいと

女

益良雄のかたき心をたやすくも
うこかすものはをみななりけり

老人

おなし人に同し事のみ語らひて
わらはるゝまてわれはおいたり

同

知り顔に語らひければ今さらに
汝はたれかともとはれさりけり

幼児

ほゝゑみてくち動かせり幼子は
はゝのそへ乳のゆめや見るらし

夢

ほゝゑめるおもわ愛らし幼子は
いかにつみなきゆめや見るらむ

同

なき母にあひて語れり夢なくは
いかにつれなきうき世ならまし

聾

きこえたる振を装ひてよそ事を
こたふるひとそあはれなりける

涙

憂につけ嬉しきにつけこほれつゝ
もろきはおいのなみたなりけり

煙火

早見よと子らに指さす程もなく
消えてはかなきつゝはな火かな

追 儼

日の本の國の内外にやらふへき
おにのおほかる世にもあるかな

四 海 清

大君のみいつか、やく日の本の
うみにはよするあたなみもなし

鼠

憎しとてむちはあけしか小鼠の
かほをし見れはうたれさりけり

牛

人のため搾る乳房のかたへにて
まてる小うしのいちらしきかな

時 計

時はかるうつはも心ゆるひなは
ときをあやまつものところぞ知れ

古 器 物

老人のあかる、世にも古ひたる
うつははかりはたふとまれつゝ

袋

肌身をは離ささりけり垂乳根の
は、のかたみのまもりふくろは

二、二六事件のとき弓といふ題にて

軍人まとをあやまりおほおみに
ゆみをひきたりあさましのよや

千人縫

ちからこめて千人かぬひし腹帯は
たまもとほらぬとりてなりけり

柿

澁柿は澁かるものと知りなから
なほかみて見るひとこゝろかな

接木

明日知れぬ命も知らて接木すと
ひとなわらひそおいのこゝろを

月前杜

ありて世にかひなき杜と思ひしは
つきに見ぬ夜のこゝろなりけり

緑

草の色にそらも匂ひて武藏野の
見ゆるかきりはみとりなりけり

赤

みや人の緋のみ袴の見ゆるかな
御そののもゝのはなの木のまに

人の歌を評して断りに

難波津のなにはの事も知らぬ身の
なによしあしをわかつへきかは

某高官の非行をにくみて

腹きりて謝りまつれ八つさきに
さきても足らぬしこつしこおみ

全國幼稚園大會の時記念品として
備前焼花瓶をおくるにつけて

あいらしき大和なてしこちこ櫻

さしてめてゝむこれの小かめに

庭球大會の節縣教育會より選手の

手拭に染めて與へける歌

火に水にねりてきたへて國の爲

つくさゝらめややまとますらを

支那事變の時孔子廟の兵火に

かゝらさりしをよろこひて

御廟は汚されさりきあた味かた

さすかひしりのみちをまもりて

支那事變の時空軍の戦捷を聞きて

空高くいさをたてたり日の本の

うみのあらわしくかのはやたか

狐

禍つ事ありもやすらん夕ゆふへ

むかひのもりにきつねなくなり

鏡

おもひきや鏡にみゆるおほ翁を

うつるをのれのすかたなりとは

秋 閑 居

静かなる宿にもあるかな虫の聲

たにのしみつのおとはかりして

雜之二

寄道述懷

開けゆく君か御代には海のはて

やまのおくにもみちはありけり

柳川筋の柳のきり倒さるゝを見て

なにひとつつみなき岸の柳さへ

をのはのかれぬ世にもあるかな

寄紅葉述懷

魔の淵に末は沈むと知らずして

いろにもゆるかきしのもみち葉

松上の鶴の御製を拜し奉りて

九重のくもの上なる田鶴か音は

しらへもたかくあふかるゝかな

日露戦役の時露兵奉天より敗走せりと聞きて

神かせに翼もをれてあはれまた

うらるのやまにかへるあらわし

思往事

思へ共かひなき事と知りなから

なほいにしへのしのはるゝかな

明治三十九年一月誕生せし三男に名を正勝と名けて

戦には正しく勝てりその名をは

得たる男の子にいさおほせてん

述 懐

ふみまよふ人の多かる世の中の
みちをてらさむともし火もかな

最うれしきもの

教へたることを素直に教へ子の

おこなふはかりうれしきはなし

学校の園の紅葉を見て

麗はしく紅葉しにけり教へ子の

かざるにしきのいろにならひて

日露戦役凱旋祝賀の式に侍りて

かちときの聲きく度に思ふかな

かへらぬひとのおやのこゝろを

皇太子殿下の御降誕あらせられたる年の暮よめる

朗かに年はくれたり日の御子を

いはひことほくこゑはかりして

長女結婚して夫婦上京の時馬の驢に

妹は脊に習ひしたかへ脊は妹を

をしへあはれめむつひあひつゝ

閑谷の山中にて

足曳の山のおくにもひとすちの

ひとのゆくへきみちはありけり

黄金萬能の世をなけきて

世は末か黄金に勝るわか子をも

黄かねにかふる親あるおもへは

京都府下に大震災のありたる時

寒し共いはれさりけり震にあひて

すむにいへなきひとをおもへは

同

おそろしき大なるしたり大和男子

ふるひたてとのかみのこゝろか

あまりに事しけゝれは

忙しき身にもあるかな人のため

世のためうこくことはかりにて

筑紫の國に悠紀田を定め給ひぬときゝて

悠紀の御田定めたまへり眞心を

つくしくくにひとうれしかるらむ

五十路の春をむかへて

何時しかも五十巡りせり我えとの

うまのあゆみのあしはやくして

人見丈紅園の茶事の席に侍りて

世の中のちりをのかれて松風の

こゑきゝをれはものおもひなし

庭園にとへる子雀を見て

またのひぬ羽ふるはせて親鳥の

ほとりはなれぬ子すゝめあはれ

寄魚述懐

人心みたれあしまのうをの名の

目のみたかかゝる世にもあるかな

昭和三年七月十四日郷里鴨方にて自分の
爲め開かれたる歓迎會の席にて竹馬の友
と語りたるを嬉しみて

ふるさとの友と集ひて五十年の
むかしをかたる今日のうれしさ

皇太神宮の宮居の新築をことほきて

内外の宮居のみかはひとこゝろ
たてなほすへきときは來にけり

歐米教育視察の歸朝後講演のため

秋日郡部に出てたる時

西東くるまにのりてゆくさくさ
世のひとなみにもみち見るかな

世道人心の廢頹をなげきて

君と親に仕ふる道のかくはかり
すたるゝものかあさましの世や

餘りに眞面目なりとて人に嫌はるゝときゝて

道知らぬ今の人にはなかゝに
きはるゝこそほまれなりけれ

式年遷宮の盛儀を拜し奉りて

あたらしくひとの心を立かへて
をろかみまつれ伊勢のみや居を

大官に瀆職事件起りければ

いさきよく腹かきゝりて大君に
あやまりまつれしこのしこおみ

同

ひる出て、國のかへかみ柱かむ

ねすみおほかる世にもあるかな

同

臣連くにをわすれてひたふるに

た、利をあさるあさましの世や

昔妖怪玉藻前を溺愛したる藤原關白
忠通ある歌會に難題當座題として月
やとらすを出し一座歌よみ得さりし
事を聞きて

清らけき月はやとらししこ草の

しこ藻はひこるみつのおもには

議會解散せられければ

天つ風ふきのまに、日比谷野の

木の葉ちるなりしとろもとろに

同

日比谷野の木葉ちらして櫻田も

かすみかせきもはるめきにけり

同

拂ひても復はらひても牛の脊の

さはへはおなしさはへなるらむ

軍縮會議開會の日に

四方のうみなみしつまりて軍艦

みなとに見えぬときそまたる、

正義をさけひて

九十九人よしや心をにこすとも

きよくあかるくわたれ世のなか

同

人はみなよし濁るとも吾ひとり

きよきこゝろをもたんとそ思ふ

國會議員總選舉のありたる日よめる

我國は神の御くにそまつりこと

こゝろしてとれおみもむらしも

耳順述懐

とし老いて人はすつとも高麗劍

われとわか身をいかてすつへき

時の記念日に思ふふしを

黄金とはたかたは言そ時はしも

やかたもひとのいのちならすや

閑谷にて安岡先生の陽明學の講義を聞きて

天地の神のこゑきくこゝちして

をしへ身にしむしつたにのさと

同

閑なる山にこもりていにしへの

ひしりのみちをきくそうれしき

入營する三男正勝を驛頭におくりて

めゝしとて人な笑ひそ嬉しさの

あまりあまりておつるなみたそ

同

吾子はもよ世の人なみに武士の

かすにいりたりおもふことなし

英佛の國と國際問題のおこりし時

外國のいはらも百合も色あせて

ひとりときめくしらきくのはな

國民更生運動の聲起りたる時

徒にひとにたよりてわれとわれ

生くる道知らぬあさましの世や

國際聯盟の態度を慨きて

いさといへは御國の爲に花とちる

やまと男の子のこゝろ知らすや

昭和八年夏東北地方の旅行をなして
秋田仙臺東京神戸横濱に立寄り孫子
にあひたる時

ゆく所かなしき子あり孫ありて

なかきたひ路もつかれさりけり

甲戌新年述懐

犬さへも門まもるなり人にして

すめらみくにをまもらさらめや

高粱川のほとりにすめる玉島牧定夫

より月見草を送りくれしを

螢とふ河邊にあそふこゝちして

ゆふへすゝしきつき見くさかな

瀆職校長のあまたいてたるを慨きて

ほこらひし教への海を濁したる

しこの船をさにくゝもあるかな

同

思ひみれは憎さも憎し教への海

かきにこしたるしこのふなをさ

同

あな恐ろし教への海に眞梶とる

わさなやめなむしまかくれして

大正十年歐米學事視察より歸りて

外國をひろく見しより國を思ふ

こゝろはふかくなりけるかな

初老の時

老人とむかしおもひしその人の

としの四十ちになりけるかな

變りゆく世相をなげきて

ともすれは外國ふりの花さきて

しなひなひゆくやまとなてしこ

老後述懐

うつしゑに影をうつして今更に

われおいにきとおもひけるかな

同

何時までも若しときけは諂ひと

知りつゝもなほうれしかりけり

同

何ひとつ御國につくす事なくて
あたらわか身はおいにけるかな

同

おもわには覺はあれと氏も名も
おもひ出されすわれおいにけり

同

めされなは老の身なから太刀とりて
いくさのにはに立たんとそ思ふ

十聯隊兵の野外演習を見て

武士の銃のけふりに見ゆるかな
御くにのためにもゆるこゝろは

豊作をことほきて

長田狭田さはにみのれり豊葦原
みつほのくにの名にもそむかて

大早害の秋田家の菊を

實りなき稻穂かりほす伏いほに
いまをさかりときくのはなさく

楠公訣別の悲曲を琵琶にきゝて

いくさとの人の袂やぬらすらむ
たゝひとものくすのしたつゆ

初めて老眼鏡をかけたる時

何時しかも年はふけいの浦の海士の
みるめかる身となりにけるかな

二、二六事件につき

早く歸れ早くしたかへいくさ人
大みことのりのありと知らすや

同

三千年の神の皇國をけかしたり
にくさもにくししこいくさひと

人情の輕薄なる世をなけきて

頼むへき人は少なしわれとわか
こゝろをたのむほかなかりけり

明治天皇記念館落成歌會に侍りて

なやみこと内外に多し天かけり
まもらせたまへすめらみくにを

ある方の歌集を見て

とりく、に美しくしき哉言の葉の
たまのまたまの丹たましらたま

妻の病の床にふせるをいたみて

わか妹子は面窶せりいかにして
しのくなるらんふゆのさむさを

勤勞したる後の心を

得もいへぬ心地なりけり務むへき
つとめはたし、あとのこゝろは

昭和十二年六十八歳の歳末の感

六十八とよはひを人に語る日も
ひと日はかりとなりにけるかな

出征する兵士を驛頭におくれる
親子の別れを見て

國のため死して歸れと勵まして
ひと知れすなくおやこゝろかな

京都へ旅行せし生徒を驛に
むかへて

恙なくかへり來にけり教へ子は
みなほゝゑみてかへりきにけり

三幡港に 明治天皇の御上陸記念碑を
建設せしを嬉しみて

したひまつる神の帝の石ふみも
いよゝたちたりおもふことなし

同上記念碑除幕式後閑院宮殿下の
拜謁をたまひしをかしこみて

かしこくも近くめされて大宮の
たまの御こゑをきくそかしこき

内山下校庭に 明治天皇臨幸記念碑を
建設せしを喜びて

石山にそゝりたちたりおほ行幸
しのふいしふみそゝりたちたり

雜之三

大正十年學事視察のため洋行せし時大西洋にて風ふき浪の立さわきければ

しまきふく沖つ荒波さかまきて

しふきおもうつにしのおほなた

洋行の歸途大平洋より富士山を見て

外つ國をすそ野となして天か下

ひとりうしはく不二のかみやま

歐米視察後滿鮮地方を旅行して

西東かはれはかはるくにふりを

見てゆくたひのおもしろきかな

朝鮮を視察して

亡ひたる國の民こそあはれなれ

御さゝきさへもひとにふまれて

南紀旅行の時

おもしろき旅にもあるかな熊野川

かうや湯のみね那智のおほたき

同上熊野の浦にて

潮なりの音もきこえて凄ましく

しまきふくなり眞くま野のうら

同紀州灘にて

しまきふく潮の御崎の舟あれて

いたくゑひたりますらをわれも

初夏日應寺にて藤井靜一大人に
案内せられさまつの茸をひきた
るを嬉しみて

おもひきややま子規きゝにきて
わか葉のかけに木のこ得んとは

美作國湯原の温泉にて

一聲をなくや湯原のほとゝきす
つゝみかたけにうちひゝくなり

同湯原より自動車にて山を越え
廣原に出てたる心をよめる

とほしろき眺めなるかな蒜か山
はゝきおほたけまへにそひえて

伯耆國名和神社に詣て後醍醐天皇をしぬひまつりて

おきの島浪たゝぬ日もいく度か
みけしのそてをぬらしましけむ

同上御來屋にて

しまきふく此荒波をいかにして
わたりましけむこのあらなみを

帝釋峽にあそひて

たちのほる谷間の霧の一すちは
もゆるもみちのけむりなるらむ

同

紅葉のうつれる川のまる木はし
いくつわたりてこゝに來にけむ

同

みねにをに右に左にいろつきて
もみち見る目のいそかしきかな

出雲國いなさの濱にて

潔よく國ゆつらすか否かさかと

たけりしかみのむかしおもほゆ

昭和五年秋 天皇陛下岡山縣に行幸あらせられ

親しく大演習をみそなはせ給ひたる時

大演習地の我が岡山縣と定めさせ

給ひしを聞きて

あかた人真心こめてすめらきを
みむかへまつれまこゝろこめて

鹵簿拜觀の時からすの聲をきゝて

朝からすなくこゑすなり大君の

みちしるへせむこゝろなるらむ

吉備郡長良山にて 天皇陛下の吹雪の

駒にめし給へるを拜し奉りて

時雨ふる紅葉の蔭にほの見える

こまのふゝきのうつくしきかな

同上長良山にて御野立所に立たせ

給ふ時時雨ふりければ

大きみのみけしぬらして畏くも

しくれふるなり吉備のあら野に

同服部郷にて大演習終れる頃時雨
ふりければ

天地もさけむはかりの銃の音を

ふりしつめたるむらしくれかな

御親閲の様を拜し奉りて

半田山動くはかりにわかひとか

きこえあけたりよろつ代のこゑ

同上大饗宴に召されたる時にし年
陪食の光榮にあみしことをおもひ出
て、

畏さのきはみなりけり給はりし

たまのさかつきかさねくくに

同上鶴鳴館にて陪食を賜はりたる直后別席にて畏くも
約二米ばかり隔りたる御前にて教育につき御下問あり
恐懼感激に堪へさりし當時の感想を詠める

あまりにも稜威畏み目はくらみ

くちはしひれておほえさりけり

陛下のいままた東宮にゐませし時拜謁の光榮に浴せ
しが今年また畏こくも拜謁を給はりければ

思ひきや數ならぬ身の玉くしけ

ふたゝひめしの幸にあはんとは

大演習後陛下より丹頂の田鶴を後樂園に
下したまひしと聞きて

千年をはこゝにゆつれと大君の

みことかしこみ田鶴は來にけむ

御陪食の光榮に浴みし時後園の大庭に鳩の遊へるを見て

大庭に下りてぬかつく鳩の子は

きみにつかふるいやも知るらし

神戸大觀艦式の時陪觀の光榮に浴して

いかめしき比叡の大艦中にして

いよりつかふるも、いくさふね

軍艦愛宕に陪乘して

見るか中に朝霧晴てちぬの海に

うかひ出てたりも、いくさふね

同

何物も見えすなりたりたつ霧に

みいくさふねのけふりましりて

同

あなを、しあやにいさまし軍艦

すへみそなはす今日のみのりは

同

ふねの烟海をおほひて難波津の

なにはも見えすなりにけるかな

同

高らかに君か代うたふ聲すなり

いまうこくらし比叡のおほふね

同

おほかたの人の心をくもらせて

むらさめけふるちぬのうなはら

同雨天にて飛行機の分列式を拜し得さりければ

めに見えず音に聞えず天かける

ふねはうみなすきりのうへにて

同小雨降りて虹の立ちければ

陸奥長門艦より艦にうつくしく

かけわたしたりにしとうきはし

同式後各艦長を召されたまひし時

君か代の聲聞ゆなりみことのり

いまのらすらし比糸の御ふねに

同還幸の途につかせたまふ御艦を拜し奉りて

大きみは都をさして立たすらし

ひとめくりせり比糸のおほふね

雜之四

明治二十三年十月三十日下したまひし

教育勅語を拜して

立も居るもゆくも歸るも大君の

くたしたまひしのりのまにく

同

みことのりに應へ奉らむ大君の

たてとなるへき子らをそたて

陳列會の時生徒の働けるを見て

教子か病みもやせんと思ふかな

わさをはけむはうれしけれとも

女の狭き心を戒しむ

富士の嶺の影を寫せる芦の湖を

なへてをみなのかゝみともかな

姉妹會圖書館落成のとき

撫子のあまたにほへる庭にまた

ふみのはやしのはなさきにけり

同

はしめありてその終りなき空蟬の

世のならひにはゆめなならひそ

浮華を戒しめて

心根のたしかなりせは深くさも

なにうこくへきなみのまに

女子の髪かさを戒しめて
氣高くも聳ゆる富士の高嶺には

はなももみちもにほはさりけり

卒業生の爲めに

一筋の見えぬ下根をちからにて

なみにまかせぬいけのうきくさ

同

今日よりは人も許さし今までは

わらへなりとてとかめさりしか

同

うき沈みいく度すれと鳩とりは

みつにはねをはぬらさゝりけり

同

覆へることもあるへし世の人のくちくるまにはゆめなのりそね

同

針を矛は、きを銃と手にとりてみくにをまもれをみななからに

同

すめらきの御民若人ときはいまつねならぬ時そつとめさらめや

同

はしたなき女なりとて吾とわれわれをなすてそをみななりとて

同

巢立せしひなに心をくはりつよそめはなたぬおやす、めかな

同

眞直なる大路をたとれ曲りたるみちはあやふしよしちかくとも

同

心して育てしその、なてしこのはなさくはるにあふそうれしき

同

曲りたる道なたとりそ袖ひきてあしきにさそふひとのありとも

同

しまきふく此荒海をいかにして

わたりゆくらんともなし小ふね

述

懐

はしきやし千五百に餘る教子か

おのかをしへをまもるおもへは

同

現にもゆめにも絶えず思ふかな

わかをしへ子のうへはいかにと

同

携さはることは多けと見る夢は

たゝをしへ子のうへはかりにて

卒業生ともか集ひて盛なる還曆の

賀筵を開きくれたる時

教へ子に取圍まれてほきことを

きくときはかりうれしきはなし

還曆を壽きて教へ子より贈りたる

煽風機の風をあみて

をしへ子か心をこめて贈りたる

うつはのかせのすゝしくもあるかな

昭和八年四月二十九日同窓會に

集ひたる人を見て

學校を今年いてたるをしへ子も

おとなふりたりころもかへして

創立三十周年を迎へて

善あしはとまれかくまれ撫子の
はなはよろつをかそへけるかな

同

よろつまでさかせて見しか撫子の
見るへきはなはすくなかりけり

同

思ふこと半もなさいたつらに
おいにけるかなますらをわれも

創立三十周年記念式にのそみて

三十年の實りをほくと教へ子は
子つれまこつれつとひ來にけり

入學考査の成績發表前に

目のあたりえらひにもれし子らを見て

また泣かさるゝときは來にけり

入學考査の成績發表後に

あはれさの極みなりけり學校の

えらひにもれて泣ける子見れば

青少年の爲めに

火に水にねりて鍛へて國のため

つくさゝらめややまとますらを

邑久郡玉津村青年の爲め講演にのそみて

朝な夕なとけや磨けやみかきなは

かならすひかるたま津わかひと

半田山の麓に育兒の目的にて若松園の
建築落成せしをよろこひて

半田山峯のわかまつつゆをなみ
いろあせにけりそたてさらめや

雑之五

中國民報の五千號を祝して

花もあり實もある種を移しうゑて

ふみのはやしはしけりこそゆけ

川口千代刀自の養老の天盃を拜受し

給ひしをことほきて

賜はりしその玉うきに君か名の

千代のよはひもくめよとそ思ふ

柴山先生の三十年勤續せられしをことほきて

三十年の雪をかさねて雲の上に

たかくそひゆる富士のしはやま

長尾翁金婚の祝年にあたらせらるゝを
壽きて

山の上に巢くへる鶴の一つかひ
つはさならへていく代へぬらむ

岡大人の古稀の賀をことほき
まつりて

七十はものゝ數かはわかうしは
しなすのかみにこゝろかよへは

岡春鷹大人の工業學校を卒へて
かへりましければ

美しく花さきにけり今日の日を
いはひかきつのはのなてしこ

花房翁の古稀の賀を祝ひて

ときはなる松の梢に千代かけて
なかくもにほふふちのはなふさ

木畑坦齊翁の八十の賀に

もゝたらす八十の港を舟出して
わたるうな路やはてなかるらん

美作國安藤親孝大人の賀に

齡高き君より見ればひるか嶺も
なきのみやまもふもとなるらん

寄柳還曆賀

もえいてし柳の糸をくりかへし
いくたひきみはわかかかへるらむ

子年立春の頃正本久治大人妻の出産を祝ひて

千代ふへき子の日の松の緑子を

めてたくきみはひきてけるかな

寄若菜還曆賀

年々につみはやせとも盡せぬは

わか菜ときみかよはひなるらん

寄杖還曆賀

もゝたひも千度も君は若かへり

つひにつゑつくときやなからむ

仙臺の人の還曆の賀

松島の松にちなみてみとり子に

いくたひきみはわかかへるらむ

竹馬の友高戸郁三ぬしの息子の結婚に

おのれ月下氷人となりしを嬉しみて

妹とせのその中とりてみ吉野の

よし野のかはのみつはにこらし

岡山日報社と岡山日々新聞社との

合併せられしをことほきて

睦しく枝とえたとをましへつゝ

はなさきにほふもゝさくらかな

ある卒業生の結婚をことほきて

葦の葉のさはりありとも睦しく

ならひてわたれいけのをしとり

同窓の友河本片岡の兩氏教育界を
退かれければ

長閑さの極みなるらんなすへきを

なしはたしたるきみかこゝろは

岡大人のこたひ養老の天盃を受け
給ひしをことほきて

千年くめ萬代くめとわか大人に

わかおほきみはうきをたまひぬ

昭和三年中山寛ぬしの詠進歌山色新の
勅題の次選歌となりたるを壽きて

新なる色ににほへるやまよりも

たかきはきみかほまれなりけり

藤原正親大人の家に初孫の出生したるを
ことほきて

藤原に小松生ひたりはしらとも

はりともならん小まつおひたり

日應寺村の林某より還曆の歌を
求められければ

林なす木々の木の葉のあり數を

やかてもきみかよはひともかな

母刀自の九十歳の高齡にて養老の盃を
拜受し給へるをことほきて

千代經ませ萬代へませ賜はりし

そのたまうきにうきをはらひて

淀川正武大人の喜字の壽をことほきて
あふみの海その水底の深ければ
かるゝことなしよとのかはみつ

津山の人山本正憲大人の還暦の壽を
ことほきて

鶴やまのつるの齡をゆつり得て
かならずきみは千とせへぬへし

兒島郡田の口笠原節大人か御大典に際し
奏任待遇の光榮に浴されしを祝ひて

浦の名の琴のしらへを高らかに
くものうへまであけしきみかな

丸川松陰先生の贈位に浴せられしを
ことほきまつりて

初御代の光をうけてまつかけに
かくれしひともあらはれにけり

笠岡町黒田ぬしの古稀の賀に

朝な夕なおいすしなすの神しまに
むかへるきみは千とせへぬへし

三門の人某の新築落成をことほきて
梅をゑかきたる賛に

萬なり山朝ふく風にあたらしき
木の香ましりてうめかをるなり

昭和五年二月 高松宮殿下の御成婚を
ことほきまつりて

みとりこき色をたゝへて高松の
かけをひたせるとくかはのみつ

大西いく刀自の喜壽をことほきて

いくといふよき名翳せる限には
かならず刀自は千とせ經ぬへし

藤井靜一大人の新築落成に招かれて
ゆく道すから

新室の木の香交りてかをるなり
たつぬるいへやちかつきぬらし

藤井靜一大人の還曆を時鳥に寄せて
若葉さす馬屋上山のたか嶺より

落ちかへりなくやまほとゝきす

都窪郡酒津の里の修養團支部
發會式にのそみて

わかひとの心の花のさくさとに
さかつてふ名はたれかおほせし

市立商業學校の選賞せられしを
ことほきて

榊もありはかりもあれと學校の
今日のほまれははかり知られす

和歌山市の人なる折井幼稚園長の帝國教育會
より表彰されたるをことほきて

ほまれたかき君を昔の友として
千代よひかはす和歌のうらつる

藤井静一ぬしの濟生事業につくされし
徳をたゝへたる記念碑に

眞心も身をもさゝけて世を救ふ
ひとこそくにのたからなりけれ

恩師松原三五郎先生の古稀の祝年なりと
聞きてことほく歌

四十とせの遠き昔のおもかけと
あまりかはらぬひとはまれなり

皇太子殿下の御誕生をことほき奉りて
畏しや日いつる國の日の皇子は

日いつるときにみあれましたり
片山翠松舎の五十周年をことほきて

一年に一枝かさねてかたやまの
五十枝のまつはいろはえにけり
紀元節を山に寄せてことほき奉る

天地のむた動かぬものは天皇の
あまつ日つきと不二のかみやま
弘西小學校の新築落成をことほきて

厳めしくそゝりたちたり名も高き
このまなひやはにひよそひして

三十餘年前校長として奉職せし
深抵小學校の四十周年に

三十とせの昔育てしちこさくら
はなさきみてりえたもたわゝに

中塚正齊大人の記念碑の建立せられしとき
其功績の大なるを喜ひて

かたりつきて後につたへん石碑に
彫りつくされぬきみかいさをは

就實高女及實女創立三十周年の時生徒并に同窓生等
より等身大の木像を彫り送られければ

たましひを移しとゝめて學校を
まもらさらめやときはかきはに

日支事變の時國威宣揚をことほきて

外國のいはらもゆりも色あせて
ひとりときめくしらきくのはな

教職員互助會の十周年を祝して

十年経て花さきにけり桃さくら
かたみにえたをむつみかはして

經濟更生町村會の爲めに

眞心のとほしき人をすくはすは
いへもとまゝしむらも生きまし

三人の男子軍籍に入りしを喜ひて

幸ありて三たりの男子軍ひとの
かすに入りたりおもふことなし

昭和三年十一月御大典の時教育功勞者
として藍綬褒章を賜はりければ

女郎花そたつる園におもひきや

からあるの花のさきいてんとは

同上祝賀會の筵にて當座題冬南天を

天つ日にあさしもとけて奥庭の

なんてんの實もいろに出にけり

雜之六

大正十五年十二月十八日畏くも 大正
天皇の御不例にあらせらるゝ時雪のふ
りければ

なこりなく雪は消えたり 天皇の

おほみなやみもやかてとくらむ

畏くも 大正天皇の御重態にあらせ

らるゝをもれ承り奉りて

祈りたる驗も見えすたのみてし

かみもほとけも世にはまさぬか

畏くも 大正天皇の御全癒をいのれる寫し繪を見て

二重橋ふたへになりておい人の

いのれる見れはあはれなりけり

同

二重橋はしのたもとに平ふして

ひとへにそ祈るおほみたからは

御大葬の時大路に雪の残りければ

今日といへは塵一つたに留めしと

おほみゆき路にゆきはふれるか

次男忠寛入院の時雪ふりければ

恙なくあらはこの子もふる雪を

たもとに受けてあそはむものを

大正天皇の御不例をきこしめして
秩父宮殿下の歐洲より御歸朝のこ
とを承りて

皇御子の舟路は遠しかしこみて

なみなたゝせそわたつ海のかみ

丙寅歳暮諒闇中述懐

天か下静まりはてゝもちいつく

おともきこえぬとしのくれかな

御大葬に参列し皇子の宮殿下たちの
御行列を拜して

日の皇子は徒におはせり高輝る

日のおほ皇子はかちにおはせり

昭和二年二月十二日多摩御陵を拜し奉りて

武蔵野や多まの浅川あさからぬ

こゝろをこめてひとりをろかむ

喪章の取去られたる日章旗を見て

かゝりたる黒雲はれて日の御旗

てりわたりたりとしのはしめに

招魂祭の場にはへりて

ものゝふの赤き心をほはせて

かみのいかきにさくらちるなり

上田及淵翁の五十年忌の席に侍りて

桃櫻かへりさきせる秋にあひて

かへらぬひとのむかししぬはゆ

鴨方に行く途次生坂なる故友間野某の墓所を拜して

里の名の加茂の生坂いくたひか

ふりかへり見てむかししぬはゆ

母刀自の病ときゝて見舞へる途次
汽車中にて

なつかしき郷の母君さきくませ

まさきくいませやかてゆくまで

母刀自の病の枕邊にて

母君はゑませ給へりわか名をは

よはせたまへりやまひかろきか

病みませる母に別れ歸る時

やすらかにいませ母君玉くしけ

ふたゝひ三たひたつね來るまで

國漢學の大家檜園小寺先生の百年祭に

から大和片枝片えにそめわけて

にしきをかさるならのもみちは

岡大人の告別式の時門人一同にかはりて

大かたの人をなかせて齊垣内の

ひともとさくら散りにけるかな

赤澤乾一ぬし愛子を失はれたる時

面わには常をよそひて人知れず

こゝろになける親こゝろあはれ

岡大人の追悼會の時寄五月雨懷舊

五月雨にみる目くもりて歌塚の

うたもよまれすなりにけるかな

昭和丙子二月八日大雪ふり姉大患にて

絶望に陥りたる朝枕邊にて

名のりしてよへと答はなかりけり

しつるゝゆきのおとはかりして

岡本玄同先生か鐵道踏切にて姫を助けん

として共に他界せられしを悼みて

哀なるおうな一人をすくふとて

あたらいのちをすてしきみはも

詠史

野見宿禰

埴生もてひとの命にかへまし、
きみかいさをはうもれさりけり

小野小町

花の色の言の葉草を残しおきて
うつろひにけりはなのすかたも

小督局

あき風に身をはまかせて女郎花
あはれさか野に枯れはてにけり

源義経

落したるゆみを命にひきかへて
ひらひあけたるこゝろ雄々しも

同

弓を手にひらひあけたる武士の
ほまれは代々になかれけるかな

常盤御前

雪を覆ふ常盤の松のありてこそ
そのみとり子もおひたちにつれ

大塔宮

世は闇となりける哉天つ日の
まもりのほしもつちにかくれて

松下禪尼

繕ひしふすまの紙はうすけれと
あつきはおやのをしへなりけり

楠正成

日の本の柱となりていつまでも
かをりつきせぬくすのひともと

上杉謙信

越後かたうみよりひろき心もて
しほをはあたにおくりましけむ

山中幸盛

山中にひそみかくれし鹿の音の
たかくも世にはきこえけるかな

大石良雄

上野のはらのしこ草かりてこそ
世におほいしはあらはれにけれ

大山將軍

ふきおろす大山風にうらる嶺の
木の葉のこらすちりはてにけり

松浦直樹校

海老井の滴終

昭和十四年十二月二十日印刷
昭和十四年十二月三十日發行

(非賣品)

著作者兼
發行者

國富友次郎
岡山市紙屋町十四番地

印刷者

村本万龜男
岡山市東中山下一二三

印刷所

研精堂印刷所
岡山市東中山下一二三

400
279

RESEARCH REPORT
NO. 100 (1950)

RESEARCH REPORT	NO. 100	(1950)
RESEARCH REPORT	NO. 100	(1950)
RESEARCH REPORT	NO. 100	(1950)
RESEARCH REPORT	NO. 100	(1950)

終

